

1. テキスト

「内部知覚について」128頁3行目から129頁4行目まで（「六」の第6段落）^{*1}

2. テキスト要約

西田は、「自覚」、即ち「自己は自己の中に自己を映す」（四、127）^{*2}ことによって、「知るもの」が「純なる作用」の基体となる、としている（四、128）。

西田のいう「自覚」とは、フィヒテ（Johann Gottlieb Fichte）の自己措定において自己認識と自己存在を不可分とする事行（Tathandlung）の概念構成を基盤に定義されている。

フィヒテは、事行を以下のとおり定義する（『全知識学の基礎』（1794））。

第一根本命題：自我は、根源的に端的に自身の存在を措定する。

第二根本命題：自我には、端的に、非我が反措定される。

第三根本命題：私は自我の中で、可分的な自我に対して、可分的な非我を反措定する。

以上、西田は、事行の概念構成を踏まえつつ、自己措定において、順次性ではなく即時性を、非我の反措定を含まない自我の措定のみをもって「自覚」を定義するのである。

すなわち、「知る我と、知られる我と、我が我を知る場所とが一つであることが自覚である。」（四、127）と措定する。換言するならば、「自覚」とは、「知る我」（＝対他的、主観的）、「知られる我」（＝対自的、客観的）及び「我が我を知る場所」（＝即自的、再帰的）が並置し連関され、同時に措定すること、即ち統一することである^{*3}。

ここで、「知る我と、知られる我と、我が我を知る場所」とは、「知るもの」を指示し、一相単体に分別する作用ではなく、三相一体（Triade トリアーデ）をなす統合した作用、即ち作用束（以下「超越論的作用」という。）として定義される。そして、「知るもの」は、「自覚」、即ち「自己は自己の中に自己を映す」ことにより統一され、「自覚」となる。

さらに、西田は、「自覚」の本質を「我々を超越したもの、我を包むものが我自身である」（四、127-128）とする。「自覚」を超越論的作用として、「我自身」を「自覚」とするならば、かかる「我自身」が「我自身」を動的に発展させ更新していく、即ち「我々を超越する」、「我を包む」のである^{*4}。

ところで、アリストテレス（Αριστοτέλης）の四原因説^{*5}のうち作用因は、質料と形相を結合する原因であり、結合する時間の経過において定義される。一方、西田のいう「純な

*1 旧版『西田幾多郎全集』第四巻、岩波書店、1965年

*2 旧版『西田幾多郎全集』の巻数及び頁数を、「(巻数, 頁数)」と表示する。

*3 本文末の「別記」により補記する。

*4 西田のいう「自発自展」のことであるが、マルクス経済学の再生産表式を隠喩として用いるならば、「我自身」が「我々を超越し」、「我を包む」とは、資本主義的生産様式において、生産様式が<単純再生産>されるのではなく、<拡大再生産>される、との言辭が可能かもしれない。

*5 『自然学』及び『形而上学』の中で、自然現象や存在について、4型〔質料（ὕλη hyle）、形相（εἶδος eidos）、作用（κινεῖν kinoun）及び目的（τέλος telos）〕の原因（αἴτιον aition）により説示される。

る作用」とは、質料を「潜在的形相」とし、形相を「現実的形相」として、全てを形相化するときに、「質料なき形相」、即ち「純なる形相」を成立させる作用である。つまり、即質料・即形相・即結合物を成り立たせ、西田のいう「永遠の今」、即ち時間の無限小である現在において定義される（四、119-121）。そして、「純なる作用」が統一し、かつ自発自展することを「知るもの」としている（四、123）。

それでは、「自覚」によって、「知るもの」が「純なる作用」の基体となる機構について、西田はどのように考えていたのだろうか。

まず、プロティノス（Πλωτῖνος）の『エンネアデス』では、一者（τὸ Ἔν τ・ヘン）から叡智（Νοῦς ノース）が流出するとしている、即ち陽光の発出や澄泉の湧出に比喻される上位者の充溢による流出がなさせるのである。次に、一者が自身を振り返って観る、即ち観照（θεωρία テオリア）によって、万物（あらゆる心象、物象、事象及び現象）が生成されるとしている。そして、一者からの流出は、必然的なものであり、完全な自由度をもつ働き、つまり躍動であるとされる。

以上、プロティノスの流出説を踏まえて、西田は言う。「自覚」が「対象として純なる作用を見る」とは、「自覚」が全ての作用を超越していることであり、「働くことなき基体」、即ち「不変不動の基体」が自己を観照することで「働きが働きを生み」出す。「働くものなき無限働き」が成立するのである。同様に、「動くものの根底に動かざるものある」、即ち「動いて而も動かざるものがある」のである。さらに、「純なる作用」は、過去や未来といった時間の経過においてではなく、現在という時間の無限小において、「無限の発展」と「無限に進み行く行先」を内包するとき実体となる（四、128）。

加えて、西田は、プロティノスのいう運動と静止の統一として「叡智的なものの存在」を掲示する。運動と静止を統一する叡智は、自由度を持ち、無相、又は形相以前であるが、「自覚」による観照、更には「我々の意志体験」による観照によって、実体として存在を可能にする（四、128）。

そして、「現実の中に含まれたる無限の行先」としての基体を、流出により万物を生成する一者とするならば、この基体が全体として我を包むときに、「我は自由の基体となる、あるいは「動き行く何の点も我ならざるはない」とは、一者との合一（脱我（ἐκστασις エクスタシス））であると言い得るかもしれない。さらに、この基体は実体であり、判断とは、この基体への統一であり、この基体の「自覚」であるとしている（四、128-129）。

また、「純なる作用」が自己自身を維持する、即ち実体として存在するとは、「知るもの」が「純なる作用」の基体になることである。この時、「純なる作用」が自身を知る、即ち自身を観照することによって、実体として存在を可能にするのである（四、129）。

以上を踏まえ、「自覚」によって、「知るもの」が「純なる作用」の基体となることにつき、以下のとおり思料する。

まず、西田は、『自覚に於ける直観と反省』（1917）において、「自覚」をロイス（Josiah Royce）の「英国に居て完全なる英国を写すことを企図する」（同書 p. 2）、あるいは「両明鏡の間にある物影が無限に其影を映して行く」（同書 p. 2）ことに換喩し考察する。そして、「自覚」とは、例えば、両明鏡の比喻、即ち光と鏡の物理的作用（直進／反射）の喩えにより、自己が自己の中に自己を写す無限に進み行く作用と言説され、この作用こそが「直観」と「反省」であるとする。以後に、本テキスト中、「自覚」とは、「自己は自

己の中に自己を映す」とし、加えて「知る我と、知られる我と、我が我を知る場所とが一つであること」と措定される。

西田は、「自覚」を、フィヒテの事行による自己措定、あるいはプロティノスの一者による流出と観照と同じく、分別した各作用による機械的・無機的機構ではなく、統合した全作用による機械状的・有機的機構として、即ち「不変不動の基体」自身において、「働きが働きを生み」出すものとしている。

また、作用の種類によって、「自己は自己の中に自己を映す」を分別し、①<自己は映す>、②<自己を映す>、③<自己の中に映す>とするならば、同順に、「知るもの」において、①「知る我」、②「知られる我」、③「我が我を知る場所」と一対一に対応する。

ところで、フッサール (Edmund Gustav Albrecht Husserl) の現象学では、意識は、意識の志向性により、作用的側面 (Noesis νόησις ノエシス) と対象的側面 (Noema νόημα ノエマ) を一体両面に具有するとされる。そして、これら側面を「自覚」に符合させるならば、「自覚」は、一方で、「自覚」の作用的側面によって、超越論的作用として「知るもの」を統一し「自覚」となり、他方で、「自覚」の対象的側面によって、基体として「知るもの」を統一し「自覚」となる。ここで、双方は並列し、生成しながら、円環を無限に進み行く。

「知るもの」が統一されるとき、超越論的作用と基体が一体両面に生成される。つまり、超越論的作用としての「知るもの」とは、基体としての「知るもの」である。時間が零点に収束するとき、時間の無限小である現在が立ち現れ、「知るもの」において、作用が超越論的作用に、即ち基体に統一されていく、「知るもの」が基体として生成される。ここにおいて、作用因による質料と形相の順次的関係が、質料を「潜在的形相」、形相を「現実的形相」として、「質料なき形相」、即ち「純なる形相」の即時的関係に転移する、よって「純なる作用」の生成がなされる。以って、「知るもの」が「純なる作用」の基体となる、と思考される。

■ 別記

「自覚」における<対他的、主観的>、<対自的、客観的>及び<即自的、再帰的>について補記するため、<主観 (subjectivity)>と<客観 (objectivity)>につき、グラフ理論の有向グラフ $[G = \{V, E(\text{source, target})\}]$: 頂点 V (vertex) と枝 E (edge) の集合 G を用いて、以下のとおり類比的な式に表示する。このとき、主体 (subject) を頂点 S 、客体 (object) を頂点 O とし、 $S - O$ 間の作用 (agent) を枝 $E(\cdot)$ と定める。※ (ここで、作用とは、認識論的、又は存在論的な成立を可能にする作用と定義する。例えば、「僕は桜を見る。」という場合、<僕>と<桜>という認識と存在の成立を可能にするのは、<見る>という作用である。)

<主観> : subjectivity = $\{V(S, O), E(S, O)\}$

<客観> : objectivity = $\{V(S, O), E(O, S)\}$

以上により、主体/客体に係る作用の方向性から<主観>/<客観>を式として表示することができる。そして、この式から $V(S, O)$ を除却するとき、主体 S と客体 O は、独立した実体であることを否定し、無限小に退化した準主体 (quasi-subject) と準客体 (quasi-object) に転移する。準主体を頂点 s 、準客体を頂点 o とするとき、<対他的、主観的>、<対自的、客観的>及び<即自的、再帰的>を $s - o$ 間の

[提出用]

作用として、以下のとおり定義する。

<対他的, 主観的> : für anders-Subjective = {E(s, o)}

<対自的, 客観的> : für sich-Objective = {E(o, s)}

<即自的, 再帰的> : an sich-Recursive = {E(s, s)}

よって、「自覚」を超越論的作用として、以下のとおり定義する。

<自覚> : *Jikaku* = {{E(s, o)}, {E(o, s)}, {E(s, s)}}

3. 哲学的問い

哲学とは何か。